

国家を〈見る〉快樂 ——『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』における ヴィクトリア女王のジュビリーの表象——¹

玉井史絵

Keywords: 『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』、ゴールデン・ジュビリー、ダイヤモンド・ジュビリー

I

1887年6月21日、イギリスはヴィクトリア女王（Queen Victoria, 1819-1901）の即位50周年記念祭、ゴールデン・ジュビリーの式典を挙げる。イギリスの歴史において在位50周年を祝うことができた国王は、ヘンリー3世（Henry III, 1207-72）、エドワード3世（Edward III, 1312-77）、ヴィクトリア女王の祖父にあたるジョージ3世（George III, 1738-1820）に続いて4人目である。ウェストミンスター大聖堂での感謝礼拝とその前後の行列を見るため、ロンドンには多くの観衆が詰めかけ、国民は祝祭ムードに酔いしれた。その10年後ヴィクトリア女王は、イギリスの王室史上初となる即位60周年記念を迎える。ダイヤモンド・ジュビリーと名づけられた記念祭がイギリスのみならず植民地各地の都市で執り行われ、偉大な帝国の女王の治世を祝う盛大な式典が繰り広げられた。²

王室の実質的な権威が低下するのと反比例して、スペクタクルとしての王室の式典の重要性が高まっていったということは、多くの歴史家が指摘するところである。例えばジョン・M・マッケンジー（John M. MacKenzie）は王室の式典が帝国主義のプロパガンダとして機能したことを指摘し（3-5）、ディ

ヴィッド・キャナダイン (David Cannadine) は、王室が急速に拡大する帝国に歴史的な威光を付与する役割を担ったと論じる (101-120)。さらに、ウィリアム・M・クーン (William M. Kuhn) は民主主義国家への移行期に王室の果たした役割に注目し、式典は国民をひとつにしたばかりでなく、政治自体を見て楽しむ劇場へと変化させたと述べている (12-13)。そして、これらの歴史家のいずれもが王室の式典の持つ象徴的機能を説明する際に取り上げているのがヴィクトリア女王のジュビリー、とりわけ1897年のダイヤモンド・ジュビリーである。

けれども当然のことながら、すべての国民がジュビリーの豪華な行列や教会での感謝礼拝を実際に見たわけではない。ジュビリーの祝賀はイギリス全土で行われたが、ロンドンでの式典を見物に行けるのは、ごく一部の富裕層に限られていた。また、仮にロンドンへ行く経済的な余裕があったとしても、王室の行列をまともに見られるという保証はどこにもなかった。1897年6月19日の『パンチ』(*Punch, or the London Charivari*) では「ジュビリーに関する統計」(“Some Jubilee Statistics”)と題する一文で、ごく一部の国民しか式典をまともに見ることができないという状況を次のように揶揄している。

289,175人の座席指定券を持っている人のうち、52.3パーセントは女王の帽子の上半分が見られるだけだろうし、17.06パーセントは決定的瞬間に昼食を取っているだろうし、8.5パーセントの人々は疲れか興奮で気を失っているだろう。それに7.17パーセントの人々はそもそもそこへ辿りつけないだろう。(June 19, 1897: 292)³

さらに、実際に式典を見た人でさえ、一部始終をすべて見るということとは不可能で、そのほんの一部分を見たに過ぎない。式典がスペクタクルとしてその効果を最大限に発揮するのはメディア、とりわけ視覚的メディアが広く国民にスペクタクルを呈示するときだったのである。逆に言えば、おそらくそのようなメディアが存在するからこそ、ジョージ3世の時は貴族たちの私的なパーティに過ぎなかったジュビリーが (Richards 12)、ヴィクトリア女王の時には最大限国民の目に触れるようなページェントとして演出されたので

あろう。

マッケンジー、キャナダイン、クーンの3人の歴史家は、スペクタクルとしてのジュビリーの重要性を指摘しつつも、メディアがどのようにそのスペクタクルを表象したかという具体的な検証は行っていない。⁴ そこで、ヴィクトリア朝を代表する視覚的メディア、『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』（*Illustrated London News*、以下*ILN*）がどのようにヴィクトリア女王のジュビリーを表象し、王室の象徴的役割を具現化したのかを検討するのが本稿の目的である。*ILN*を分析するにあたっては、*ILN*と同じく当時の中流階級の保守層に向けられた二つのメディア、日刊紙『タイムズ』（*Times*）と風刺漫画雑誌『パンチ』⁵を合わせて検討する。前者は文字情報がいかに視覚情報へと変換されたかを解説する手がかりとして、後者はジャンルの異なる視覚的表象が互いに共鳴し合っていることを示す例証として用いたい。

II

*ILN*はハーバート・イングラム（Herbert Ingram）によって1842年に創刊され、現代に至るまで165年の伝統を誇っている。イングラムは『ウィークリー・クロニクル』（*Weekly Chronicle*）が挿絵つきのときにはよく売れることに着目し、印刷業者ヘンリー・ヴィゼテリイ（Henry Vizetelly）の賛同を得て上質の挿絵入り週刊誌を企画した。この企画は見事に当たり、1842年5月14日の第一号では26,000部を記録、その後順調に部数を伸ばし1863年には300,000部となった。同時期、日刊紙『タイムズ』の発行部数が70,000部であったことから、その人気ぶりが伺える。発刊当時の6ペンスという値段は労働者にとっては手の届くものではなかったから、その読者層は中流階級以上に限定されていたと言えよう（Sinnema 15-20）。⁶

〈挿絵〉というと文字情報の添え物のように聞こえるが、挿絵がそもそもの企画の出発点にある*ILN*にとっては、絵こそがむしろ真実を伝えるものであった。創刊号の挨拶は「もしもペンが誤った議論に陥ったとしても、少なくとも絵筆だけは真実の精神を持って未来を指し示すものでなくてはならない」（May 14, 1842: 1）⁷と高らかに宣言している。それゆえ*ILN*では、現地へ赴いてスケッチをするスペシャル・アーティストや、現地で委託を受けたアー

テストを使って、実際に〈見た〉情景を紙面に再現しようとした (Sinnema 63-65)。「東の果てから西の果てまで、人々の行動が好奇心を掻き立てるところどこでも——我々は注視し、彼らの行為は風に乗って我々のもとに届く」(January 4, 1845:



1)⁸と1845年の年頭の挨拶では述べられている。だが、実際はすべての挿絵がスペシャル・アーティストや現地のアーティストによるものでは

〈図版1〉 Preparations for the Diamond Jubilee Service at St. Paul's Cathedral: View from Messrs. Pawsons' and Leaf's Premises in St Paul's Churchyard, from which Our Artists Will Sketch the Ceremony (*ILN*, June 19, 1897:826)

なく、むしろ大部分がロンドンの*ILN*本社周辺にいるアーティストの手によるものであった。例えば創刊号の1ページ目を飾るハンブルグの大火の挿絵は、大火のニュースを聞きつけた編集者が大英図書館でハンブルグの絵を入手し、それに煙、炎、見物人を加えて出来上がったのだった (Sinnema 70)。言葉以上に真実を伝えるはずの絵が、実は捏造ものだったというわけだ。

ロンドンが中心舞台となったジュビリーの場合、挿絵のほとんどはアーティストが実際に見た情景なのかもしれない。〈見た〉という信憑性をその権威の源としている*ILN*は、例えば1897年のダイヤモンド・ジュビリーの報道では、式典の準備の進むセント・ポール大聖堂の前庭の写真(図版1)とともに、「アーティストはこの位置に座り、ここに掲載された写真の角度から式典を見る」のだと (June 19, 1897: 826)、⁹ わざわざ説明している。だが、ジュビリーの挿絵には、実際にはありえないアングルからの挿絵や、観客の位置からの肉眼ではおそらく見ることができない細部を描いた挿絵も含まれている。挿絵はアーティストが本当に〈見た〉情景というよりはむしろ、アーティストや編集者が読者に〈見せたい〉情景なのだ。けれども、いったん挿絵として紙面に固定された情景は、真実のものとしてイギリス全土、ひいては帝国全土に流通し、国民の目に焼き付けられて、集団的記憶と化す。*ILN*は「事実是我々のコラムを通して歴史となる」(1845 preface: iv)¹⁰と豪語したことがあったが、*ILN*の流通性と視覚的メディアの持つインパクトを考え

ればそれはあながち誇張ではないであろう。ピーター・W・シネマ (Peter W. Sinnema) の言葉を借りるなら、*ILN*は世界を写す鏡であると同時に、まさに「世界を創った」(31) のだ。¹¹ 以下、ゴールデン・ジュビリーとダイヤモンド・ジュビリーの表象を検討することにより、*ILN*が何を強調し、どのような世界を形づくろうとしたのかを見ていくことにする。

III

時代順に、まず1887年のゴールデン・ジュビリーから見ていきたい。ジュビリーは何よりも盛大な式典を挙行できる国家の統率力と秩序を印象づける絶好の機会であった。*ILN*では行列の行程、行進の順序、ウェストミンスター大聖堂の礼拝の席次などを、6月18日には予定として、25日には当日の記録として、そして7月2日にはレビューとして詳細に伝えている。3回にわたってほぼ同じ内容の記事が繰り返されるのであるが、そのこと自体、式典が予定通りつつがなく執り行われたことを強調し、国家の統率力を証明するものとなっている。7月2日の記事ではローヌ侯爵 (ヴィクトリア女王の四女儿イーズの夫、Marquess of Lorne, 1845-1914) の落馬というアクシデントを伝えているが、この小さな事故の記述は逆に秩序を際立たせる効果を生み出している。

国家の秩序は、挿絵では整然と行進する王室や軍隊の行列として表象される。例えば「トラファルガー・スクエアを行進する行列」と題する絵(図版2)は、騎馬隊に先導されて進む女王の馬車を描いている。秩序は整然と進む行列だけではなく、沿道から行列を見守る群集によっても強調される。同じくトラファルガー・スクエアの労働者



〈図版2〉 The Royal Procession in Trafalgar Square (*ILN*, June 25, 1887: 709)



〈図版3〉 The Life Guards Keeping the Square
(*ILN*, November 19, 1887: 607)

の暴動を描いた1885年2月13日の挿絵や1887年11月19日の挿絵（図版3）と比べてみればその違いは明らかだ。暴動を描くとき、アーティストの視点は群集と同じ高さにあって、群集ひとりひとりの様子や表情までもつぶさに描き、その場の混乱を伝えようとする。一方、王室や軍隊の行列を描いた挿絵では、アーティストの視点は通りの中心の高みにあって群集を見下ろしている。この群集の秩序は、国家の警察力の証であった。6月22日の『タイムズ』の社説は、「多くの危険が多くの群集のなかには潜んでいる・・・行列を見物するひしめき合った群集を見事に統制したばかりでなく、暴動と混乱の企てを全く許さなかった最大の功績は警察にある」（9）¹²と述べて、隠れた危険を未然に防いだ警察組織の監視能力を賞賛している。*ILN*の挿絵には、沿道に整列する騎馬隊とその背後に控える警官隊が描かれ、行列に歓声をあげる群集が、警察によって制御されたものであることを暗示する。また、7月2日の『パンチ』に掲載された「警察官へ」（“Punch to the Peelers”）と題する挿絵（図版4）では、パンチ氏が警察官を見上げてその優れた仕事ぶりに対する謝意を表明している。挿絵に添えられた詩には、「パンチ氏はよく見える場所から彼らを誇らしく眺めていた」（318）¹³と記さ

の暴動を描いた1885年2月13日の挿絵や1887年11月19日の挿絵（図版3）と比べてみればその違いは明らかだ。暴動を描くとき、アーティストの視点は群集と同じ高さにあって、群集ひとりひとりの様子や表情までもつぶさに描き、その場の混乱を伝えようとする。一方、王室や軍隊の行列を描いた挿絵では、アーティストの視点は通りの中心の高みにあって群集を見下ろしている。この群集の秩序は、国家の警察力の証であった。6月22日の『タイムズ』の社説は、「多くの危険が多くの群集のなかには潜んでいる・・・行列を見物する



〈図版4〉 Punch to Peelers (*Punch*, July 2, 1887: 318)

れている。そして、詩は「パンチ氏は注意深く観察し / 群集の荒っぽい騒ぎのなかでの彼らの奮闘ぶりを注視し、 / 純粋な誇りと賞賛の念でいっぱいになって / 心から“よくやった！”と皆のまえで声をかける」と結ばれる。パンチ氏が賞賛するのは警察国家のような監視の網の目ではなく、あくまでも「自由な人民による市民の統治」なのだが、ここで注目すべきはパンチ氏の視点である。挿絵では背の低いパンチ氏が堂々たる長身の警察官を見上げる構図となっていて、警察官の偉大さを強調しているが、一方、挿絵の下にある詩では、逆にパンチ氏が高みにあって警察を監視している。「注意深く観察」しているのは警察官ではなく、一市民であるパンチ氏のほうであり、「よく見える場所」に立って国家の治安組織が見事に機能し秩序を維持する様子を観察しているのだ。*ILN*のトラファルガー・スクエアの行列を描いた挿絵（図版2）に戻ってみると、ここでパンチ氏の優位な視点を付与されているのは、読者自身であるということがわかる。すなわち、読者自身がパンチ氏のように高みから、警察によって保たれた秩序を俯瞰することにより、「純粋な誇りと賞賛の念」に満たされるのである。

群集は警察力によってのみ統治されているのではなく、そこには人々を心理的に統一する原理が働いているということを*ILN*は示唆している。その原理とは、言い尽くされたことではあるが、母なる女王への共感（*sympathy*）であった。6月22日の『タイムズ』の社説は、女王は「個人的な喜びや悲しみを私たちと共有し、女王といえども人間的共感を求める女性に過ぎないということを、そして与えられた以上に惜しみなく共感をお返しになられるということを示された。50年間女王は国民のすべての悲しみと幸せをご自身と結び付けられてこられた」（9）¹⁴と論じる。女王と国民はこの一節のなかで、共感を与え与えられる関係にあり、同じ「悲しみや喜び」を感じるものとして一体化されている。*ILN*も同じような論調で6月25日の記事のなかで、「国民は王室の妻であり、母であり、未亡人で今や祖母、曾祖母となった女王に個人的な共感と尊敬の念を抱いている」（721）¹⁵と述べている。この記事は女王の肖像画（図版5）に添えられたものだが、一週間前の6月18日に掲載されたもう一枚の肖像画（図版6）と比べてみると、*ILN*が強調しようとした女王の一面が明らかになる。二枚の肖像画は似通っているが、25日の女王



〈図版5〉 Queen Victoria (*ILN*, June 25: 1887, 721)



〈図版6〉 Victoria, Queen of Great Britain and Ireland, Empress of India (*ILN*, June 18, 1887: 693-94)

は王冠を抱いていない。さらに、物思いにふけるような眼差しが憂いを秘めた母性的な表情を醸し出し、私人としての女王の姿を読者に印象付けようとしているのだ。『タイムズ』や*ILN*の記事はともに「喜びや悲しみ」によって国民と女王を結び付けている。身分や財産の隔たりにもかかわらず「喜びや悲しみ」は等しく人々に訪れる。等しく訪れるからこそ、人々は隔たりを越えて共に感じるができるだとこれらの記事は訴える。これこそは同時代の小説でも繰り返し表現された、〈共感〉の原理であった。「ヴィクトリア朝の小説やその批評において、〈共感〉という言葉は一般に、階級疎外の問題に対する個人的、情緒的解決法として使われた。それは、互いの感情や普遍的な人間性を確認することで社会的な差異を克服しようとする試みであった」(15)とオードリー・ジャッフア (Audrey Jaffe) は論じている。逆に言えば「普遍的な人間性」を強調することによって、社会的な差異は隠蔽されたのである。私人としての女王の「喜びや悲しみ」のなかでも、人々の記憶にとりわけ強烈に残されていたのは、言うまでもなく最愛の夫アルバート公 (Prince Albert, 1819-61) の死である。女王はジュビリーという祝賀の祭典だっ

たにもかかわらず紫色の正装を断固として拒否し、黒い服を着ることを主張して譲らなかった（Arnstein 171, Hibbert 381）。この女王の決断は純粹に亡き夫への想いから来るものであったのかもしれないが、一方で女王は自身と国民を結びつける絆が何であるのかを本能的に理解していたと言えよう。すべての人に等しく訪れる、いわばデモクラティックな死別の悲しみこそが、国民との一体感の源だったのだ。

女王の母性が最も強く現れたのは、ウェストミンスター大聖堂の感謝礼拝のあと女王が息子や孫達ひとりひとりにキスをした場面であっ



〈図版7〉 Queen Kissing Her Children after the Jubilee Thanksgiving Service in Westminster Abbey (*ILN*, June 2, 1887: 9)

た。この場面は『パンチ』でも「いかに女王が女性らしいかということ、人々があらためて実感した」(July 2, 1887: 320)¹⁶瞬間として取り上げられている。7月2日の*ILN*の挿絵(図版7)では、息子や孫達に取り囲まれた女王が母性をたたえた優しい表情を浮かべて、長男の皇太子エドワード(Prince of Wales, Edward, 1841-1910)の手を取っている。注意すべきは、おそらくこの絵を描いたアーティストは、女王とその家族をその表情までが見て取れるような至近距離では見られなかったということだ。これは*ILN*が〈見た〉というよりは〈見せたい〉情景なのだ。女王と息子達の背後には王座が描かれていて、ひとりの母としての女王と同時に、王権を司る公人としての女王を見るものに意識させる。*ILN*はこの場面を「愛情に満ちた家族の集まり」(July 2, 1887: 2)¹⁷と評したが、背後の王座は女王の母親のような愛情が国家全体に及んでいることを示唆している。6月22日の『タイムズ』も、「女王が決して失うことのなかった愛情深い共感が大きな流れとなって返され」、「すべての会衆が家族になった」(June 22, 1887: 9)¹⁸と述べ、女王の母性は親族だけで

はなく、会衆を、ひいては国民をもひとつにするものとして表現したのだった。

治安組織による統治と母なる女王による共感にもとづく統治という、統治の二つの側面が表されている報道として、6月22日にハイド・パークで行われた「子どものお祭り」(Children's Fête)を見ておきたい。「子どものお祭り」は公立小学校(Board School)に通う26,000人の貧しい子どもたちをハイド・パークに集めるという壮大な行事だった。子どもたちはリージェント・パークとセント・ジェイムズ・パークの二箇所に終結し、それぞれから2,500人のいくつかの分隊に分かれ軍隊に先導されてハイド・パークへと行進した。ハイド・パークに到着した子どもたちは、分隊ごとに割り当てられたテントで貴族の婦人たちのボランティアによって食事を与えられ、記念のジュビリー・マグで飲み物を振舞われ、夕刻に女王を迎えるまで様々な催し物を楽しんだと『タイムズ』や*ILN*は伝えている。莫大な数の子どもを統率するという困難にもかかわらず、すべては滞りなく遂行されたようである。『タイムズ』は、「政府の法律やシステムの不満を表明する目的以外は、大勢の市民がほとんど訪れることのない」公園の一角が子どもたちの「満ち足りた声」の響く場へと変容したと述べた(June 23, 1887: 6)。¹⁹ 『タイムズ』にとって「子どものお祭り」は労働者階級の未来のあるべき姿を示すものだったと言えるだろう。同じ記事で『タイムズ』は、「昨日のお祭りほど、この一週間が特別なものであることを幼い心に印象付けるべく、周到に計画された行事はないだろう」(6)²⁰とも述べ、この行事の目的が、将来にわたって持続するような王室への畏敬の念を子どもたちに植えつけ、権力に対する抵抗の芽を摘むことであることを暗に物語っている。

*ILN*の6月25日と7月2日に掲載された2枚の挿絵はそれぞれ、3,000人が動員されたとする警察力によって維持された集会の秩序と、女王の母性的な愛情を表している。ハイド・パーク上空から「子どものお祭り」を鳥瞰的に描いた見開き大判の挿絵(724-25)(図版8)は、挿絵そのものの大きさのアリのように描かれた無数の人物によって、この行事の壮大さを読者に印象付けている。この絵を描いたアーティストが実際にバルーンに乗ってこの情景を見たのかどうかはわからない。だが上空という特権的な場所から子どもたちを描くことで、秩序を強調し、ある種の支配感さえ感じさせる。小さい

ながらも画面手前に描かれた警察官の存在がトラファルガー・スクエアを行進する行列を描いた絵と同じく、秩序の背後にある治安組織の力を暗示する。一方、7月2日掲載の挿絵(図版9)は鳥瞰的な絵とは対照的に、お祭りに参加した一人の少女に焦点をあてる。



〈図版8〉 Jubilee Assemblage of Thirty Thousand London School Children in Hyde Park (*ILN*, June 25, 1887: 724-25)

少女の名はフローレンス・ダン、12歳。7年間皆勤で学校に通った優等生だったため、女王からジュビリー・マグを直接手渡されるという栄誉を得た。挿絵には彼女が女王からマグを手渡される瞬間が描かれている。素描的な挿絵であるが、7月9日の記事と合わせて読むと、この挿絵の持つ重要性が浮かび上がってくる。「ジュビリーの光景」(“Pictures of Jubilee”)と題する記事のなかで筆者は、「国民のなかの女王、子どもたちの只中にある母」(57)²¹こそがすべての情景のなかで最も記憶に残るものだと述べている。鳥瞰的な絵では点でしかない女王が直接子どもと触れ合う瞬間を描くことで、*ILN*は「国



〈図版9〉 The Queen Presenting Florence Dunn with the Jubilee Mug (*ILN*, July 2, 1887: 7)

民の母」なる女王を表現しようとしたのだった。

このように*ILN*は1887年のゴールデン・ジュビリーの報道を通して、警察による統治システムと、母なる女王による共感にもとづく、いわば心の統治システムの両面を強調し、この二つのシス

テムが見事に機能し、秩序を保って繁栄する国家像を読者に示したのである。

IV

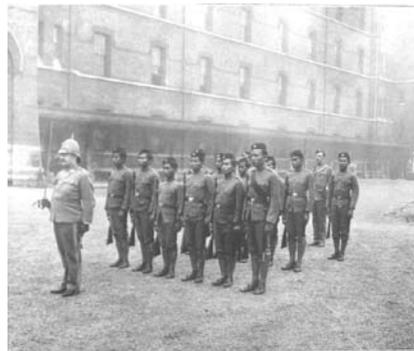
次に1897年のダイヤモンド・ジュビリーの報道を見てみたい。1887年から1897年の10年間に*ILN*の紙面は大きく変化している。ハーフトーン印刷により水彩画のような濃淡を持つ絵が現れ、それまで*ILN*の紙面を飾っていた木版画の数が激減した。また、写真が木版に写される過程を経ず、そのまま印刷されるようになった。印刷技術の変遷は本論の主旨からは離れるのでここでは立ち入らないことにする。けれども技術の変化はジュビリーの表象にも大きな影響を与えている。例えば、群集を描く際の木版画に見られた細部にわたる描写——「子どものお祭り」の鳥瞰図などがその最たる例だが——はハーフトーン印刷では困難であり、写真がその代替を果たすことになった。逆に当時の写真技術では、遠くにあるものをクローズアップすることは不可能であり、その部分は絵に頼るという分業がなされた。²²

ダイヤモンド・ジュビリーは、植民地大臣（Colonial Secretary）のジョセフ・チェンバレン（Joseph Chamberlain, 1836-1914）の提案によって「帝国の式典」という位置づけがなされた。ヨーロッパの王室を招待する代わりに、植民地からの代表と軍の部隊を招くことにしたのである。安上がりで、しかも高齢の女王にとって肉体的、精神的負担の少ない方策として考え出されたのであるが（Kuhn 63, Arnstein 188, Hibbert 456-57）、それは同時に時節にかなったものでもあった。1887年から1897年のわずか10年のあいだに、列強の植民地獲得争奪戦はますます激しさを増し、イギリスもガンビア、ウガンダ、ローデシアなどで新たに領有権を宣言するなど、好戦的な拡張主義に向かっていった（James 200-16, Morris 37-47）。バーナード・ポーター（Bernard Porter）によれば、ほとんどのイギリス人にとって、帝国は19世紀の大半は縁遠いものであった。だが、世紀も終わりに近づき、帝国が他の列強の脅威にさらされるようになってはじめて、政府は帝国主義的政策への国民の支持を取りつける必要性に迫られ、帝国に関する教育や宣伝に乗り出したのだとポーターは論じる（42-46）。この議論には賛否両論があるだろうが、少なくとも1897年のジュビリーは、〈帝国〉を国民に視覚的に印象付けるには絶好の機会だった。

式典計画の委員に任命されたエッシャー伯（Second Viscount Esher, 1852-1930）は、帝国の偉大さを植民地からの代表者や労働者階級に知らしめるべく、劇的に式典を演出し、王室の式典としては前代未聞のリハーサルまで行って式典を成功へと導いた（Kuhn, 57-81）。

1897年の*ILN*の紙面も1887年のジュビリー報道と比べて、はるかに帝国主義的色彩が強いものとなっている。確かに、1887年の報道にも帝国を意識させる記事はある。例えば、ウェストミンスター大聖堂の感謝礼拝の記事でインドの首長達の宝石をちりばめた豪華な衣装についての言及がなされたり、インドの騎兵隊の写真木版画が掲載されたりしている。けれども、それ以外には少なくともジュビリーの式典に関する記事のなかには、特に帝国を意識させる部分はない。一方1897年のジュビリー報道では早くも5月29日に、イギリスに到着した西アフリカとニュー・サウス・ウェールズの部隊の写真が掲載している。また、6月12日には、チェルシー駐屯地に集結したイギリス領ガイアナ、ニュー・サウス・ウェールズ、トリニダード、シエラレオネ、イギリス領北ボルネオの部隊の写真（図版10）が載せられ、ボルネオ軍に関しては「文明の教えを学んで、人殺しの本能を抑えられるようになった」（807）²³ などという帝国主義のお手本のような記述も添えられた。さらに6月19日になると、インド軍の写真や各植民地の部隊を描いた見開き大判のスケッチ（図版11）が掲載され、「大英帝国のはるかかなたから派遣された部隊の存在によって、ピクチャレスクな効果」（842）が期待できると記者はコメントしている。

ジュビリーのロイヤル・プロセスションを評して、6月23日の『タイムズ』は「帝国の長く輝かしいパノラマ」（14）と呼び、6月26日の*ILN*は「ロンドンにおける帝国主義のページェント」（874）²⁴と表現した。「パルマル街を行進する行列」と題する6月26日の*ILN*の挿絵では、画面手前に大きくインドの兵士が描かれている。



〈図版10〉 The British North Borneo Force (*ILN*, June 12, 1897: 807)

1887年のジュビリー報道に見られたような母なる女王による共感にもとづく心の統治の言説は、女王と国民との関係から、女王やイギリスと植民地の関係を表すものへと拡大されている。もちろん、これよりはるか以前から女王は「帝国の母」



〈図版11〉 Colonial Troops in England For Queen's Diamond Jubilee (JLN, June 19, 1897: 850-51)

として表象されてきたが、1887年と1897年のジュビリー報道を比べる限りにおいては、後者のほうがより鮮明にそのイメージを打ち出そうとしているのがわかる。『タイムズ』の6月23日の社説は、前日、トラファルガー広場から全世界に向けて電報で送られた女王のメッセージについて触れ、次のように述べている。

民衆は声と身振りの両方で、この上なく熱狂的に、敬愛する女王に対する純粹で強い共感を表そうと必死になった。・・・女王の心臓は、いつも国民の気持ちと呼応し、国民が示す敬意に応えようと、暖かく鼓動しているのを私たちはよく知っている。そして、女王が全世界の臣民に向けて送った慈悲深いお言葉は、そのことをもう一度確信させてくれた。(14)²⁵

ここでは1887年のジュビリー報道と同じく、国民と女王との共感し合う関係が再び強調されている。1887年と違うのは、女王の愛情が「全世界の臣民」に向けられている点だ。同じ社説の別の部分では植民地の部隊の人々とイギリス人との一体性が強調される。

生まれや育ち、信条や膚の色が何であれ、皆はまるで生まれながらのイギリス人であるかのように、等しく女王への忠誠心を抱き、すべて

の者にとって真の意味で母国と言うべきものへの熱い心を持っている。そして、このような気持ちに対して、暖かな歓声が湧き起こった。…大英帝国のすべての歴史は—その輝かしい過去や、願わくば、さらに輝かしい未来は—女王のこの一握りの臣下たちが今ここにいて人々から歓待を受けたという事実に、端的に力強く凝縮されている。彼らは異国の空の下で生まれ、彼らのなかでも本当に様々な性格の違いがあり、大部分このイギリスの人々とは色々な意味で異なっているが、この瞬間国民の心を支配している感情において、我々とひとつなのだ。(14)²⁶

「彼ら」と「我々」との違いは、両者がともに持つ女王や母国に対する忠誠心によって帳消しにされ、「彼ら」と「我々」は一体化される。同じ日の『タイムズ』には、帝国の各地で行われた祝賀についての社説も掲載され、それ



〈図版12〉“Happy and Glorious, Long to Reign over Us, God Save the Queen!” (ILN, June 26, 1897: 863)

ぞれの民族がそれぞれのやり方で「女王への共通の忠誠心と帝国への共通の献身的愛情」(14)²⁷を表したと記されている。ここでも「彼ら」と「我々」の共通性、一体性が強く示唆されているのである。

このように「帝国の母」を頂点として本国と植民地のすべての臣民がひとつになったイメージは、「幸福で栄光に満ち、長く我々を統治せよ。女王陛下万歳！」というキャプションがつけられた6月26日の有名な表紙絵(図版12)に、最も端的に表現されていると言えるだろう。手前には剣を高く掲げたインドやアフリカなど、植民地各地の兵士が大きく描かれ、奥のほうにはイギリス軍兵士

の姿も見られる。女王以外はすべて男性のなかで、女王の足許にただひとり、白い服を着た子どもが佇んでいる。闘争的な忠誠心の発露の場にはそぐわない、か弱い子どもの姿が、母親としての女王を呈示しているかのようだ。しかし、その表情には1887年のジュビリー報道の絵に見られたような母性的な柔らかさはなく、女王はどこかはるかかなたを見つめるような厳しい眼差しをしている。熾烈な列強との植民地争奪戦を勝ち抜くにふさわしい強い帝国の強い母のイメージを、このときの*ILN*は求めていたのかもしれない。

V

以上、ゴールデン・ジュビリーとダイヤモンド・ジュビリーの表象を、*ILN*を中心に見てきたが、最後に『パンチ』の3枚の挿絵をもって結びとしたい。まず、1887年6月18日の「イギリスのライオン、ジュビリーの準備をする」(図版13)と題する挿絵と、1897年6月26日の「急いで着替え」(図版14)と題する挿絵を見てみたい。前者はイギリス国民の象徴たるライオンがジュビリーの祝祭で賑わう街へ出かけようと、ユニオンジャック柄のズボン



〈図版13〉 The British Lion Prepares for the Jubilee (*Punch*, June 18, 1887: 295)

をはいて身支度を整えている絵。後者は祝祭の見物を終えたうら若い女性が、今度は海軍の観艦式を見に行こうと、頭にユニオンジャックの髪飾り、袖にもユニオンジャックの柄という出で立ちをしている絵。ライオンも女性も同じように鏡の前に立ち悦に入っている。いずれも身体そのものが国家表象と化した自らの姿を見つめて一時の自己陶醉の快樂に浸っているわけだが、*ILN*の紙面を眺める読者もこのライオンやうら若い女性と同じだと言うことはできないだろうか？ 整然と行進する行列、沿道に規律を乱さずに並ぶ人々、

なかった現実が、ジュビリーの約束していたようなばら色のものではなかったことだけは確かである。ILNは王室のスペクタクルをその紙面に華やかに繰り広げるにより、既に衰退の兆しを見せていた帝国の最後の輝きを見るひとときの快楽を読者に与えたのだった。

註

- 1 本稿は2007年11月17日、日本大学文理学部で開催された日本ヴィクトリア朝研究学会第7回シンポジウム「二つのジュビリー」（司会兼パネリスト：小池滋、パネリスト：村岡健二、新井潤美、玉井史絵）での発表原稿に加筆、修正を加えたものである。尚、改稿にあたっては、『言語文化』の匿名の査読者から数多くの貴重なコメントをいただいた。記して深甚の謝意を表したい。
- 2 1887年、1897年のジュビリーに関しては、学術的な研究書ではないが、それぞれジョン・ファブ（John Fabb）とカーネル・ピーター・ウォルトン（Colonel Peter Walton）によって概観できる。またグレッグ・キング（Greg King）はダイヤモンド・ジュビリーの執り行われた1897年の一年間の王室の出来事や行事、日常生活、風習などに関する詳細な記述を試みている。ヴィクトリア女王の伝記は数多くあるが、本稿ではウォルター・L・アーンシュタイン（Walter L. Arnstern）、クリストファー・ヒバート（Christopher Hibbert）、ドロシー・マーシャル（Dorothy Marshall）のものを参考にした。
- 3 原文は次のとおり。
Of the 289,175 seat-holders 52.3 per cent. will view only the top half of the Royal Bonnet, 17.06 per cent. will be busy with lunch at the critical moment, 8.5 per cent. will have fainted from fatigue or excitement, and 7.17 per cent. will not get there at all.
- 4 ジュビリーの視覚的表象に着目した研究としては、トマス・リチャーズ（Thomas Richards）の論文が挙げられる。リチャーズは、ゴールデン・ジュビリーの時期、商品の広告やラベルに女王の肖像がいかに利用されたかを分析している。
- 5 1841年の創刊当時はチャーチズムを支持するなど、ラディカルな一面を持っていた『パンチ』だが、その後、時を経るにしたがって、徐々に保守的になっていった。ケネス・ベーカー（Kenneth Baker）は「体制による体制のためのマガジン」（121）とまで言いきっている。ジュビリーに関して真に王室に批判的な風刺を行なったのはフランスやドイツ、アメリカなど、イギリス国外のジャーナリズムだった（Baker 121, Savory and Marks 21）。ヴィクトリア女王の風刺漫画に関しては、ベーカー 104-21、ジェロルド・セイヴォリイとパトリシア・マークス（Jerold Savory

and Patricia Marks) 21-43、マイケル・ウィン・ジョーンズ (Michael Wynn Joes) 88-128を参照のこと。『パンチ』に掲載されたジュビリーに関連した主な挿絵は小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ—画像資料で読む19世紀世界』第5巻126-37、第6巻18-45に再録されている。

6 *ILN*の歴史に関しては、*ILN*のホームページに掲載されたイザベル・ベイリー (Isabel Bailey) の記事やヒバート (Hibbert 1975) 11-15にも詳しい。

7 原文は次のとおり。

[I]f the pen be ever led into fallacious argument, the pencil must at least be oracular with the spirit of truth.

8 原文は次のとおり。

From the extreme east to the extreme west, wherever the actions of men are awakening man's curiosity—

We have our eyes upon them, and their deeds,

Come to us on the wind.

9 写真に添えられた一節の抜粋は次のとおり (下線部が引用箇所)。

St. Paul's Churchyard is more transformed, perhaps, than any other spot of the same area. The preparations are not things of beauty by any means, but in view of the near approach of the Diamond Jubilee celebrations it may interest our readers to be informed of the exact coign of vantage from which our Artists will sketch the picturesque ceremony to be held before the great entrance to St. Paul's Cathedral. . . . It will be seen from the photograph here reproduced that our Artists will occupy a position which commands as good a view as can possibly be obtained of the Queen, the Princes, and the Thanksgiving generally.

10 原文は次のとおり。

[F]acts . . . have become history through our columns.

11 “The *ILN* makes the world.” シネマは*ILN*創刊時の最初の10年に焦点をあて、*ILN*がイギリスの優越やテクノロジーの進歩を強調することによって、中流階級の国家アイデンティティを構築していく過程を検証している。リン・ピケット (Lyn Pykett) はヴィクトリア朝のジャーナリズム研究のあり方を論じた論文の中で、雑誌を単なる文化の反映として読むのではなく、その文化を形成した中心的な要素として分析する必要性を強調している (3-11)。

12 『タイムズ』の一節は次のとおり (下線部は引用箇所)。

In the streets the same harmony prevailed, and the city's millions rejoiced to see their Sovereign in their midst. But, as every one knew, there were many dangers lurking in the vast concourse—dangers of panic, dangers of unavoidable mishap, and possible dangers, at any rate, of actual treason and misfeasance. . . . [T]he casualties were not numerous, considering the vast concourse of people in the streets. For this, and for the total absence of all attempt at violence and disturbance, as well as for their admirable management of

the crowded throngs who witnessed the procession, the utmost credit is due to the police.

- 13 以下、詩からの引用部分の原文は次のとおり。

Mr. Punch from post of vantage proudly viewed them; / . . . / True type of a free people's civic rule! / . . . / But *Mr. Punch's* vigilant observation / Marked their hard toil amidst the mob's wild fun, / And, filled with genuine pride and admiration, / He publicly awards his warm "Well done!"

- 14 原文は次のとおり。

[S]he has made us the sharers in her own personal joys and sorrows, and has shown us . . . that a Queen is but a woman who yearns for human sympathy, and can give it in return even more liberally than it is bestowed. For fifty years the Queen has associated herself with all the sorrows and all the happiness of her people.

- 15 肖像画に添えられた記事の一説は次のとおり（下線部は引用箇所）。

[L]et us here speak of her Majesty only as a Woman, not as a great Sovereign, Queen, and Empress. This half-century presents, in the domestic life of our Queen, a family history of the most interesting character . . . [S]everal mournful events, above all that which twenty-five years ago rendered the Queen a widow, and those which deprived her of one beloved daughter and one beloved son, have attested the common liability of all such human relations to become, at the parting hour of mortality, occasions of natural sorrow. These sad events . . . have found response in the hearts of English men and women, to whom the duties, virtues, and blessing of household union appear sweet and sacred. They feel much personal sympathy and esteem for the Royal wife, mother, and widow, now become . . . the grandparent . . . and great-grandparent.

- 16 『パンチ』の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

Until the close of the Service the Queen represented Royalty in its noblest sense. It was only when Her Majesty turned round to receive the homage of her children, and insisted, contrary to all precedent, upon kissing them, that the People realised once again how intensely womanly their Sovereign Lady was, and why they not only respected and admired, but loved her. It was then that many eyes were dimmed with unbidden tears, and every heart echoed the earnest prayer, "God save the Queen!"

- 17 *ILN*の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

Amidst the splendid publicity of that superb assembly, and with the consecrated pomp of that solemn ecclesiastical ritual, just finished, and still profoundly felt by every serious mind, a true Woman's heart, the source of the sweetest and holiest emotions, spontaneously overflowed; and so the central spectacle became that of an affectionate family party, which is far better than all the glory of all the Kingdoms on earth.

- 18 『タイムズ』の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

That loving sympathy in which she has never failed was returned in full flow yesterday,

not only in Westminster Abbey, where the Queen's salutation of her children and kindred was the one touch of nature which made the whole assembly kin, but throughout the long triumph of the Sovereign's brilliant progress through the streets of her capital.

19 原文は次のとおり。

The portion of the park which was the scene of the festivity was that which is seldom visited by any large concourse of civilians, except for the purpose of expressing dissatisfaction with the laws or the system of government. On this occasion, however . . . nothing but expressions of satisfaction were heard.

20 原文は次のとおり。

It would be hard to conceive any form of enjoyment more calculated to impress upon youthful minds the exceptional circumstances of the present week than yesterday's fête.

21 原文は次のとおり。

The Queen amongst her people, the mother in the midst of her children . . . that was the picture that will most endure.

22 *ILN*の印刷技術の変遷に関しては*ILN*ホームページのイザベル・ベイリーによる記事の中で言及されている。ヴィクトリア朝の挿絵印刷技術一般に関してはジェオフリー・ウェイクマン (Geoffrey Wakeman) を参照のこと。

23 *ILN*の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

[T]hey are smart little fellows, in brown holland uniforms, with bright red caps, and do not seem particularly dangerous, having learnt a lesson of civilisation so far as to restrain homicidal instinct.

24 6月19日の*ILN*の原文は、“[T]his military display will be rendered unique in picturesque effect by the presence of the contingents from the remotest corners of the British Empire.”

6月23日の『タイムズ』の原文は “[a] long and splendid panorama of Empire.”

6月26日の*ILN*の原文は“London's pageant of Imperialism.”

25 原文は次のとおり。

The masses entered, with the keenest zest, into the endeavour to express, by voice and act, their true and living sympathy with the Sovereign they revere. . . . We are well assured that the Queen's heart, always responsive to national emotion, beat warmly as she acknowledged the respectful homage of her subjects, and the gracious message she has sent to her people all over the world confirms the assurance.

26 『タイムズ』の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

The procession was fitly opened by the contingents representing the colonies and dependencies of the Crown, and later on the “Imperial Service troops,” raised in the native States of India, as well as the regular Indian Army, had their place in the pageant. All, whatever their blood and breeding, their creed and colour, are as loyal to the Queen and as

warm-hearted towards what is to all, in the truest sense, the Mother Country as if they were born Englishmen. The sentiment elicits a hearty response. Nothing was more remarkable in yesterday's demonstration, after the personal expression of devotion to the Queen, than the ardour of the welcome given to the Colonial and Indian troops. They were, indeed, men of whom any Sovereign might be proud and whom any nation might be glad to hail as fellow-subjects. The whole story of the British Empire—its glorious past and, we hope and believe, its not less glorious future—is summed up, succinctly but emphatically, in the presence and in the reception of these handfuls of the Queen's lieges, born under the strange skies, differing in the most varied characteristics among themselves, and for the most part distinguished from the people of these islands in diverse ways, though at one with us in the feelings that command the national mind at this moment.

27 『タイムズ』の一節は次のとおり（下線部は引用箇所）。

Men of many races, of many civilizations, of many creeds and many tongues, in one great congregation hold the same solemn festival from the rising to the setting of the sun. All of them without distinction, in their own way and according to their own rites, are proclaiming their common loyalty to their Queen, their common devotion to the Empire that has so greatly increased and prospered beneath their wise and benignant rule.

28 原文は次のとおり。

BRITISH LION (rather limp). “WELL, IT HAS BEEN A SPLENDID SUCCESS!! AND NOW—A—WE MUST REALLY GET *BACK TO BUSINESS!*!”

References

- Arnstein, Walter L. *Queen Victoria*. Houndmills: Palgrave, 2003.
- Bailey, Isabel. “The Early History of the *Illustrated London News*.” Online. http://www.iln.org.uk/iln_years/earlyhistiln.htm
- Baker, Kenneth. *The Kings and Queens: An Irrelevant Cartoon History of the British Monarchy*. London: Thames and Hudson, 1996.
- Cannadine, David. *Ornamentalism: How the British Saw Their Empire*. London: Penguin, 2002.
- Fabb, John. *Victoria's Golden Jubilee*. London: Seaby, 1987.
- Hibbert, Christopher. *Queen Victoria: A Personal History*. Cambridge, MA: Da Capo, 2001.
- _____. *The Illustrated London News: Social History of Victorian Britain*. London:

- Book Club Associates, 1975.
- Illustrated London News*. 1842, 1845, 1885, 1887, 1889.
- Jaffe, Audrey. *Scenes of Sympathy: Identity and Representation in Victorian Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 2000.
- James, Lawrence. *The Rise and Fall of the British Empire*. London: Abacus, 1994.
- Jones, Michael Wynn. *A Cartoon History of the Monarchy*. London: Macmillan, 1978.
- King, Greg. *Twilight of Splendor: The Court of Queen Victoria during Her Diamond Jubilee Year*. Hoboken, NJ: John Wiley, 2007.
- Kuhn, William M. *Democratic Royalism: The Transformation of the British Monarchy, 1861-1914*. Houndmills: Macmillan, 1996.
- MacKenzie, John M. *Propaganda and Empire: The Manipulation of British Public Opinion 1880-1960*. Manchester: Manchester UP, 1984.
- Marshall, Dorothy. *The Life and Times of Victoria*. London: Widenfeld and Nicholson, 1972.
- Morris, Jan. *Pax Britannica: The Climax of an Empire*. London: Faber and Faber, 1998.
- Porter, Bernard. "What Did They Know of Empire?" *History Today*, Oct. 2004, 42-46.
- Punch, or the London Charivari*. 1887, 1897.
- Pykett, Lyn. "Reading the Periodical Press: Text and Context." *Investigating Victorian Journalism*. Eds. Laurel Brake, Aled Jones, and Lionel Madden. London: Macmillan, 1990, 3-18.
- Richards, Thomas. "The Image of Victoria in the Year of Jubilee." *Victorian Studies* 30 (1987), 7-32.
- Savory, Jerold, and Patricia Marks. *The Smiling Muse: Victoriana in the Comic Press*. London: Associated UP, 1985.
- Sinnema, Peter W. *Dynamics of the Pictured Page: Representing the Nation in the Illustrated London News*. Aldershot: Ashgate, 1998.
- Times*. June, July, 1887, June, July, 1897.
- Walton, Colonel Peter. *A Celebration of Empire: A Centenary Souvenir of the Diamond Jubilee of Queen Victoria 1837-1897*. Staplehurst: Spellmount, 1997.
- Wakeman, Geoffrey. *Victorian Book Illustration: The Technical Revolution*. Newton Abbot: David & Charles, 1973.
- 小池滋編. 『ヴィクトリアン・パンチ—画像資料で読む19世紀世界』全7巻 東京：柏書房、1995-96.

The Pleasure of “Looking at” the Nation:
The Representation of Queen Victoria’s Jubilees in the
Illustrated London News

Fumie TAMAI

Keywords: *the Illustrated London News*, the Golden Jubilee, the Diamond Jubilee

This essay aims at examining the representation of two Queen Victoria’s Jubilee celebrations, the Golden Jubilee in 1887 and the Diamond Jubilee in 1897 in the *Illustrated London News* (ILN). Scholars of nineteenth-century British history have pointed out that the spectacle of royal ceremonies acquired more importance as the political power of the monarch waned. According to them, Queen Victoria’s Jubilee had a symbolical function of attaching to the monarch historical luster, and uniting the nation and the empire. The Queen’s Jubilee, however, could fulfill its function most effectively when the media, especially the visual media, presented the spectacle of the ceremony to a wide-ranging audience. To put it conversely, it was because such media had existed that the two jubilee celebrations were held as magnificently and pompously as was possible. The purpose of this essay is to analyze the way in which one of the most popular visual media of that period, the *ILN*, represented the jubilees.

The *ILN* reports of the 1887 Golden Jubilee emphasized the power of the nation which enabled her to hold a grand ceremony keeping the large audience in order. In the illustrations of the *ILN* the order was visually represented by the crowd standing along the street and looking at the royal procession without making any disturbances. The *ILN* suggested that the order was maintained not only by the police force but also by the spontaneous will of the people, who were bound to each other in their

loyalty to the maternal queen. The reports of the 1897 Diamond Jubilee assumed a more imperialistic tone than those of the 1887 Golden Jubilee. The *ILN* inserted many pictures and photographs of the colonial troops gathering at Chelsea Barracks and depicted the royal procession as a “pageant of imperialism.” The Queen was represented as the mother of the empire, under whom the people of both the mother country and the colonies had closely united.

In these ways the *ILN* offered its audience the pleasure of “looking at” the nation through the illustrations of the jubilees, and stirred up their patriotic pride. The pleasure, however, was only a temporary one, and after the jubilee the audience had to face the harsh reality of the world in which the British Empire was gradually losing its hegemonic power.